水の都おおがき
短編小説コンクール
優秀作品集　二〇二二

水の都おおがき
短編小説コンクール
優秀作品集　二〇二二

小説のこと　大垣のこと（選評）

審査員長　中村　航

本コンクールは、大垣を舞台としていたり、大垣ゆかりのエピソードや事物が登場する短編小説を募集したものだ。四〇〇〇字以内の短編という制限があるため、気軽に応募できる反面、どれだけ物語性やテーマ性を込められるのか、に作者の力量が問われる。

応募作品に目を通したところ、どれも大垣をテーマにしていながら、それぞれユニークな世界観が描かれており、似たものがなかった。書く人にとっての大垣は、これほどまでに多様なのだな、とまずはその〝当たり前のこと〟に感心してしまった。

多様である、というのは評価軸が分散するぶん、審査は難しいのだけど、樋口健司審査員と天岡久美子審査員の力も借りて、最優秀賞作他を選ばせてもらった。

最優秀賞は「義母とふたりで舟下り」で、嫁姑の関係がユーモラスに描かれた作品だった。最初から最後まで軽妙な筆致で、全作品中、エンターティメント小説として最もストレスなく読めた。短い小説であるにも関わらず、非日常の世界を旅して戻ってくる、という物語性を内

包している。
「嫌いではないけれど苦手な義母」「『可愛い息子』の嫁」という、確執とまではいかない壁のある関係の二人が、なりゆきで舟下りに乗り合わせ、大垣の自然に触れる。環境の変化に気を張り知らずに疲れていたことを、初めて優子が自覚し、義母もそれを悟る。川沿いの美しくのどかな風景のなかで、思いがけず心を通わせる様が自然で、愛おしかった。舟を降りた途端、義母の態度がもとのように戻るのだが、舟に乗る前よりも義母に近づけた想いを優子が抱くのが、よい読後感を与えてくれた。

優秀賞は「ペンキを塗る」で、これは一見、不思議な話だった。亡くなった父の夢が呼び寄せたかのように、知らなかった父の過去の善行が明かされる。今では父親である主人公が、かつて教わったペンキ塗りを息子へと伝える。言葉で伝えられないことが、親子三代に継がれていく様が、力強く鮮やかだった。

作中で語られないことが多いため、読者に想像を強いる作品だ。その想像が人によって大きく異なってしまっては小説として失敗なのだが、この作品では、寡黙な祖父の姿や、ペンキ塗りというモチーフが、そうさせないだろう。最後の主人公の変化は、もう少し大きく見せてもよかったかもしれない。

佳作の「清水になった松岡」では、大垣の「水」を象徴として使うことで、濡れ衣を着せられてドロップアウトしてしまった主人公・松岡の人生の転機が描かれていた。大垣の「水」が起こした奇跡のような、読みごたえのある物語だ。

自暴自棄となった松岡が、全財産八百円でたどり着いた先が大垣であり、最後の三十円も「カラフルなドリンク」の詰まった自販機で捨てるように失ってしまう。このことでそれまでの松岡の「死」が描かれたのは見事だ。この死があるから、その後、大垣の湧水で潤い、この地で生まれ直していく様に心が震える。恩人の少女・弓ちゃんのキャラクターも純粋で愛らしかった。

惜しくも選外になってしまった作品についても、それぞれ少しずつ触れておく。
「ガーベラ」は、老老介護の行き詰まりという重いテーマを扱った作品だった。認知症の妻・朝子の介護で追い詰められていく耕介は、旧友と偶然、再会する。旧友の言葉によって事態は好転していくのだけど、鍵になるのが「自分の過去」であったことが物語として力強く、また説得力を増していた。頑なになりかけていた耕介の心がほぐれていく様にリアリティがあった。安堵が広がっていくその先で、朝子が選んだ「ガーベラ」が美しく咲く姿が見えるような、綺麗なラストシーンも良かった。
「大垣夏物語」は、男の子が「おがっきぃ」である、というファンタジー設定が可愛らしかった。主人公の冒頭のエピソードが印象的で、彼の恋心を、読者として素直に応援できた。個人的に「おがっきぃ」は、他のゆるキャラと比べても、もの凄く可愛いと思う。
「女友だち」は他愛のないおしゃべりが良かった。同じものを見聞きして育っても、同じ人生を送ることはできない。大人になったいまではそれぞれ環境が大きく変わりながら、それでも互いに影響し合って成長してきた、幼馴染の良い関係が描かれた物語だった。
「田舎町のカルスト」は主人公とハル、そしてシュンの仲良しトリオが、カルストの山肌を駆

け回って遊んでいたであろう姿が目に浮かんだ。平凡なりく、運動神経抜群で活発なハル、洒落者のシュンという三人のキャラクター分けが上手かった。

「おおがき思い出街歩き」では、慎介にとって地元である大垣のそこここに「慎介の記憶」があることが理解でき、彩乃の心に安心が広がっていく。その様が気持ちよくて、ほっとする読後感が味わえた。おそらくクイズラリーに参加してもらったのだと思いますが、この場を借りて、お礼を言わせてください。ありがとうございます！

「化石」では、初老の男性主人公が、金生山の化石館での外国人女性との束の間の邂逅を通して、自分の半生を振り返る。外国人留学生・外国人労働者の置かれた環境に対する問題提起にもなっており、簡単に答えを出せる問題ではないぶん、さりげなく抑えた筆致が良かったと思う。

　同じタイトルの「化石」は異質な友人との邂逅を通して、無邪気なだけではいられなくなってくる中学生という年代を上手く表現していた。説明のつかない変化や感情が、ちゃんと伝わってくるのは、「化石掘り」というモチーフの良さによるものだと思う。

「揚げおだまきソウルフード」では、「引っ越してしまう親友に、自分のことも大垣のことも忘れてほしくない」という想いが切実に伝わってきて、娘を見守る母の気持ちとともに、愛すべき小説だった。揚げおだまきが食べたくなった。

「風花」は、青春時代の痛手をたどりながら、いまではそれが懐かしく優しい痛みに変わっていることを再確認する、主人公の成長を描いた作品。主人公の現在の姿（環境など）や、このセンチメンタルジャーニーに至った動機を作り込むことで、物語にもっと厚みが生まれると思う。

「始まりの話」は、主人公・れん視点の一人称でヒロイン・幸との深い関係を匂わせ、その正体を最後まで明かさないよう、注意深く仕掛けが考えられている作品だった。構成で読ませる作品だが、たとえば現実から逃げがちで、かつての恋人の死にすら煮え切らない態度をとる幸のこれまでの人生が感じられると、より説得力が生まれると思った。

「ジャンク・ストーリーズ」は、「四人の映像マニアの高校生たちに大垣の街の紹介動画を撮らせる」という設定で、そのなりゆきを描くことで読者にも大垣を紹介するという発想がユニークだった。高校生らしい無謀さで、膨らませる構想（妄想）が楽しく読めた。

「海のない町」結婚目前で破局の危機を迎えた亮太の恋愛をきっかけに、母の思いがけない真実が語られる物語と、兄の恋愛を応援しようとする妹・有紀の奮闘が同時進行するユニークな構成。どちらも面白さがあったが、ボリューム的に考えるとテーマの主従を、もう少しはっきりつけたほうが読みやすくなったと思う。

「帰郷」は、諦念を抱えて帰郷の夜行列車に乗り込んだ主人公・蓮太郎が、労務者風の男と乗り合わせ、その風貌に似合わぬ実直そうな生き方のなかから、救いのようなものを見出す物語。夜から朝へと走る夜行列車という、蓮太郎の心情の変化が読者にもわかりやすい舞台を選んだのが上手かった。蓮太郎の持つ背景が説明的になってしまったのが惜しい。

「秋の日、水門川にて」では二人の女子高生の姿が、刹那を切り取る「写真」というモチーフを使って、雰囲気良く描かれていた。主人公と先輩のやり取りはとても楽しめたが、二人の人となりをもう少し描いて、「女子高生同士の濃密な時間」をより打ち出してもよかったかもしれない。

「櫪城クエスト」では、主人公・俊と、その迷いを払拭する中年男性との出会いが描かれる。

偶然とも必然とも感じられる不思議さがあるその邂逅は、読む者に勇気を与えてくれる。俊の置かれている環境をもう少し描けば、彼の決断がより大きなものとして読者に伝わると思った。

目次

最優秀賞　義母とふたりで舟下り……木治陽子　1

優秀賞　ペンキを塗る……大垣博士　9

佳作　清水になった松岡……群鳥安民　19

最優秀賞

義母とふたりで舟下り

木治陽子

「え、話が違うやん。」
うららかな春の日、私は目から炎が出るくらい怒っていた。
「ごめん、ごめん。急に会社から呼び出しをくらってさ。だから、代わりに行ってきてよ。」
と、ちっとも悪いと思っていないのんきな顔で夫は言い放ち、そのまま玄関を出て行ってしまった。
今日は私たちの引っ越しを手伝うという名目で東京に住む夫の母、つまり義母がやってくる日。引っ越しは一週間前、すでに荷物は私がほぼひとりで片づけた。皮肉屋の彼女とうまくいっているとはいえない関係なので、夜自宅でおもてなしを担当するので、日中は夫が街を案内することになっていたのだ。それがいきなり一日相手をしろというのは契約違反も甚だしい。
心底怒っていたが駅での待ち合わせ時間は迫っている。投げやりな気分で、クローゼットから手近にあったブラウスとロングスカートを選び、化粧もそこそこに飛び出した。私の友達が見たら、腰を抜かすくらいの手抜きメイクだ。
違約金で夫に何を買ってもらおうかと考えながら駅に着くと、せっかちな姑はすでに来ていて、息子の姿が見えるのを今や遅しと待ち構えていた。
「おかあさん、ご無沙汰しています。」と近づくと、息子でなく、嫁が歩いて来るのを苦々しい顔で見ていたくせに、さも今気づいたように
「あら、優子さんじゃない。雄一はどうしたの?」と先制パンチを繰り出してきた。

会社から急に呼び出されたという話をさも申し訳なさそうにつぶやく私にため息ひとつ。
「まあ、仕方ないわね。あなたとでもいいわ。さ、いくわよ。のんびり来るから、もうすぐ予約の時間よ。」と、せかせか歩きだした。
は? 何の予約ですか。まったく聞かされてないんですが。ランチにはまだ早すぎますよ、と思いながら付いていくと、橋の近くに白い小さなテントが見えてきた。
「早く手続きして。」と促され、のぼりを見ると、『水の都おおがき舟下り』と書かれている。
水のきれいな街らしいよ。水まんじゅうが美味しいらしいよ。そんな情報だけを持ち、大阪から越して来た。荷解き、転居届、住所変更など様々な手続き。目の回るような忙しさで、そんな催しが行われているなんて全く知らなかった。
「新幹線代高かったから、ここは優子さんのおごりね。」と、ちゃっかり代金を支払わされ、そのまま乗り場へと進む。
手渡されたライフジャケットを着けながら、隣を見ると、義母が若い男性係員に、天気がいいだの、東京から来ただの、話しかけている。やっぱりこの人苦手だなあ、と思っていると、
「優子さん、順番よ。あなたから乗りなさいよ。」と急かしてきた。
係員が差し出してくれた手を「ひとりで乗れるんで。」と断り、和船に右足を入れた途端、バランスを崩し、ぐらり。慌てて差し出された手を掴み、体勢を立て直す。義母は悠然と体を支えてもらいながら優雅に乗り込んでくる。
「優子さんの白いスカートを汚さないように気を使うわぁ。舟に乗るのに、そんな長いのを着て来なくてもねえ。」
またしてもチクリ。私も今日の予定を聞いていたら、この服は選びませんでしたよ、と心の中

でつぶやく。義母の毒舌は今日も絶好調だ。
舟の前と後ろに船頭さんが乗り、それぞれ竹の竿を持っている。「水の都おおがき」と書かれている真っ青な法被がまぶしい。船頭さんが竿をさして舟がスタート。右へ大きくグラリ。思いがけない揺れに思わず、義母にしがみついてしまった。なんてことをと、気まずい思いで、目をそらしながら、手を離す。今度は左にグラリ。すると義母が「わっ。」と声を上げて私にしがみついてきた。
「案外揺れるのねえ。」
と照れながらつぶやいている。気まずい空気を何とかしたくて、
「おかあさん、龍の口橋ですって。」と目の前に近づいてきた橋の名前を口にする。その瞬間にもグラリ。今度はふたりで抱き合ってきゃあと叫んでしまった。無茶苦茶気まずい空気のなか、

　かざす手に　かざす手に
　城と光と水がある～

と、のどかな唄が流れてきた。なんかその節にほんわかした気持ちとなり、ふうっと息を吐いて上を見ると、桜・桜・桜。
「おかあさん、見てみて。すごく綺麗ですよ。いつの間にか桜が満開です。」
興奮して、きれいキレイと繰り返す私。はっと気づくと、義母が私の顔をじーっと見つめ、
「桜がこんなに綺麗に咲いているのも気づかないくらい気が張っていたのねえ。」
としみじみとつぶやいた。確かに生まれ育った大阪を離れたことがない。大阪以外の土地を知らない私はここ大垣に土地見知りをしていた。慣れない土地、慌ただしい日程での引っ越し、

そして聞きなれないイントネーションの言葉。引っ越しが決まってから、気の張りつめた毎日だった。あれをしなきゃ、これもしなきゃと気持ちばかりが逸って、周りを見る余裕なんてなかったのかもしれない。
ふうーっと大きく息を吐いて、空を見上げて大きく息を吸う。ピンクの花びらが舞い降りて来る。その上に広がる真っ青な空。あー、幸せだなと唐突に思った。もう一度大きく深呼吸をして、船が進む川面を見ると、澄んだ水の中に揺れる緑の藻たち。なんて綺麗。なんて豊かな景色なんだろう。
「おかあさん、私素敵な街に引っ越して来たみたい。」
ぽつりと言葉がこぼれた。すると、今まで見たこともないような笑顔で
「優子さん、よかったわねえ。」
嫌味っぽくて、いつもチクチク毒を吐く義母の思ってもみない言葉に桜の花びらがぼんやりと揺れた。「おかあさん、ありがとう。」と素直に言えた。お互いにっこりと顔を見合わせると、そこからは特に話すこともなく、桜を見たり、棹差すたびに右に左に揺れる動きに身を任せたりと、時間の流れを楽しんだ。
ずいぶん長く乗ったつもりだったが、時間にすると三十分くらいで、船着き場に着いた。係員の手に引かれて舟を降りる。なんだかふわふわしている。帰りは船でたどった道を徒歩で戻るようだ。川沿いを横に並んだり、前後になったりでのんびり歩く。私たちを乗せてきた舟が川面を手動ではなく、モーターで遡っていく。升を売っているお店があり、日本酒好きの義父のために買い求める。可愛いケーキ屋さんがあり、義母が優子さんお好きでしょうと升に入ったチーズケーキをふたつ買ってくれた。

いつの間にかスタート地点に戻ってきた。笑顔で楽しかったかと尋ねられたので、大きくうなずく。来てよかった。乗ってよかった。

「ゴールデンウイークには、たらい舟も出るからまた来てね。」と宣伝された。

「おかあさん、たらい舟ですって。楽しそう。また一緒に乗りましょう。」

うきうきしながら義母に言ってみた。すると、

「え、優子さん、今度は息子と来たいわぁ。あなたはお友達を誘えば。」

へ？

なに。何。なに言ってるの。すっかり義母と仲良くなったつもりの私はその変容ぶりについていけない。「チーズケーキ、ちゃんと雄一に私からって渡してね。」と追い打ちまでかけられた。

そっか、義母は変わらない。さっきは川と桜が見せてくれた幻だったのかも。なんだかおかしくなって、声を出して笑ってしまった。

「さあ、おかあさん、私たちの新居へ案内しますね。雄一さんはまだ仕事だろうから、ふたりでケーキ食べちゃいましょう。」

義母の手を握って勢いよく歩き出した。さっきの幻は私に義母の操縦法を教えてくれたようだ。

優秀賞

ペンキを塗る

大垣博士

夢を見た。父の夢だ。
私は屋根の上でペンキを塗っていた。
そこへ父が梯子を伝って昇ってきた。七十歳ではあるが、危なげな様子は微塵も無い。
父は屋根の片隅に広げられた塗装用具一式をつぶさに観察すると、そこから離れて煙草に火をつけ、川の方角を眺めた。
目線が日常よりも三メートル高いだけなのに、視界は随分と広がるものである。
雲ひとつない空の下に、杭瀬川の桜並木が見えた。満開だった。陽を照り返す桜の白と空の濃い青とのコントラストが鮮やかだ。
「手伝おうか?」と父は言った。
「いえ、大丈夫です」
間髪入れずに私は断った。ペンキを塗ると言っても大層なことではない。屋根の本体は瓦葺きなのだが、縁側を増築した部分がトタン葺きになっており、その間口十メートル、軒幅三メートルの範囲を塗るだけである。
素人の気晴らしの作業なのだから、人生の先輩にうろつかれて指図などされたら、気分が台無しになる。とにかく丁重にお断りした。父も素っ気なく「そうか」と言うだけだった。
父は家の周りのことは何でも自分でする人で、私の塗装方法も父のものである。昨年、実家の外壁の塗装を手伝ったのだが、そのときの方法を今回そのまま実践しているのだ。準備や手

順が違っていようものなら、父は黙っていないはずである。何も言わないのは、お眼鏡に適っているということなのだろう。
暫くの間、父は桜並木を眺めていたが、やがて、ひとつ放屁なされた。そして、煙草を消し、吸殻を携帯灰皿に入れ、梯子を降りた。
私は軒下に向けて「何か用があったんじゃないの?」と声を掛けた。しかし父は、なんでもないというように右手を挙げると実家の方へ去って行った。後ろ姿が目に焼きついた。
私が最後に後ろ姿を見たのは……。
そこで、目が覚めた。
父は十一年前に亡くなっている。私が屋根のペンキを塗った年の秋のことだ。東北の震災の少し前である。進行の早い癌だった。
私は父の夢をあまり見たことが無い。
何かの前触れではないかと不安になった。

その日は土曜日であった。朝食のテーブルで夢の内容を話し、子供達に尋ねた。
「お爺ちゃんは何か心残りがあるのかな?」
数日後には大学三年生となる長女、飛鳥は私に厳しかった。
「そりゃ、この世を恨んでるでしょうよ。貧乏くじを引いたような人生だもの。戦争中の生まれで、中学卒業から四十五年間黙々と働いて、定年で落ち着いたかと思ったら妻に先立たれて、挙句に自分も癌でしょ。息子ふたりは国立大学を出してもらっても、省みもしない。お父さんも叔父さんも酷いわよ。お爺ちゃんに何かをしてあげたことある? 亡くなった時も、あんま

りお金残ってなかったんでしょ。何か出来たと思うんだけど……」
それに対して、高校二年生となる長男、敦は意見が違うようだった。
「爺ちゃんはお金なんか気にしてなかったと思うよ。爺ちゃん、言ってたよ。食えさえすれば十分だ、金は天下の回り物、って。そもそも、他人を羨んだり恨んだりする人じゃないと思うけど……。特別に何かがあって夢に出てきたわけじゃないよ。見回りだよ。ときどき来るんだ。きっと今日は桜の花に誘われたんだよ。今朝は僕のところにも来たよ」
「何か言っていたかい？」
「別に何も……。学校にちゃんと行っているか？　って。それだけだよ」
孫の方が息子よりも可愛いようである。

午前十時過ぎだった。妻が私に声を掛けた。
父を訪ねての来訪者だと言う。てっきり御老人と思い込んでいたが、意外にも三十歳台半ばの背の高い男性だった。彫りの深い顔に見覚えは無い。ジャケットの生地は良いものではなかったが、着こなしが上手かった。
男性は青井と名乗った。
「お父様には生前お世話になりました。亡くなられたのを知らず、今日まで失礼をしてしまいました。突然で申し訳ないのですが、ご位牌に手を合わさせていただきたいのです」
彼が何者なのかは知らないが、誰であれ、父を悼んでくれるのは有難いことである。私は実家を開け、仏壇のある和室に彼を招き入れた。妻が座卓にお茶と羊羹を出してくれた。
青井さんは和室の天井近くに掲げられた遺影を見上げ、仏壇の中の位牌を見つめると、「本

当に亡くなられたのですね」と呟いた。
彼はお供え物の包みを仏壇の脇に置き、位牌に向かって長い間手を合わせていたが、やがてお参りを終えると、座卓を挟んで私に向き合った。私はおそるおそる尋ねた。
「父とはどのような関係で……」
「僕の母がお父様と一緒に働かせていただいておりました。しかし、実際に助けていただいたのは僕です。青井の息子についてお父様から何か聞いておられませんか？」
父から同僚の息子の話など聞いたことは無かった。仕事場の話を家に持ち込む人ではないのだ。私はゆっくりと首を横に振った。
「そうですか……。ともかく、お話しは致します。僕はお父様に借りがあるのです。息子さんに黙っておくわけには参りません」
私は「父と何かありましたか？」と尋ねた。
彼の目は遠くのものを見つめ始めた。
「十七年前のことです。僕は高校三年生でした。幼い頃に父を亡くし、母と二人暮らしだったのですが、当時はその母も病気で入院しておりましたので、我が家の家計は苦しいものでした。僕は勉強が好きだったので大学へ行きたかったのですが、進学を諦めるつもりでいました」
彼は視線を遺影へ移すと、目を細めた。
「或る日、お父様が母の見舞いに来てくださいました。そして僕の話を聞くと、金は出すから大学へ行け、と言い始めたのです。最初、僕は信じませんでした。しかし翌日になると、お父様は本当に現金百万円を持って現れました。僕はいつかお返しますと何度も言ったのですが、お父様は、大学に行って欲しいのは自分だから君は返す必要がない、の一点張りでした。それ

でも、いつか返せばよいのだと思い、僕は御好意に甘えることにしました」
彼はひと息おくと、視線を私へ戻した。
「その後もお父様は支援を続けてくださいました。結局、四年間で計六百万円を僕は受け取りました。おかけで大学を出られましたし、それなりの会社にも就職できました。今の僕があるのはすべてお父様のおかげなのです」
青井さんは両手を座卓の上に置くと、身を乗り出してきて、私に迫った。
「僕はお金をお返ししたいと思っています。分割にはなりますが、返したいのです。どこに振り込ませていただきましょうか？」
私は頭を掻いた。文字通り掻いた。
「父は返さなくて良いと言ったのですよね」
「そうはおっしゃいましたが……」
一瞬、お金があれば飛鳥の学費に当てられると考えた。しかし、それは父の金なのだ。父の言葉を私が覆すわけにはいかない。
「ならば、受けることはできません」
「他人の僕が得をするのはおかしいです」
「損得ではないのです。受け取れません」
彼は座り直すと、唇を噛み、首を捻った。引き下がるつもりはないようだ。彼は言った。
「では、せめて、半分の三百万円だけでも受け取ってはいただけないでしょうか？」
『半分』という言葉が私には引っかかった。
癇に障ったと言った方が近いかもしれない。

「父の思いは半分に分けられるものではありません」
私は彼の瞳の奥を覗き込んだ。
「あなたが返したい相手は既にいないのです。何もできないのです。ですから、返すことではなく、まずはしっかりと受け取ることを考えてください。そしてそのうえで、受け取ったものの意味を考えてやってください」
青井さんは、一度、天を仰ぐ動作をしたが、すぐに俯いて考え込んだ。
私はその様子を見ながら、私のささやかな思いを彼に話すべきか否かについて思い悩んだ。そして悩んだ末に、話すことを止めた。
それは私の思いでしかない。彼にとって意味は無いのだ。これは受け取った者が各々の立場で考えれば良いことなのだ。
青井さんは暫く俯いていが、やがて顔を上げると、私を見て小さく微笑んだ。
「すみません。何をどう考えたら良いのか、今の僕にはわかりません。時間はかかるかも知れませんが、よく考えてみます」
私は頼んだ。「そうしてやってください」
彼が、またお参りさせてください、と言うので、いつでもどうぞ、と応じた。
玄関で青井さんが靴を履く姿を見ていて、ふと、彼の出身大学が気になった。尋ねると、果たして、地元の大学の名前が返ってきた。それは私と弟が卒業した大学でもあった。
去り行く青井さんの後ろ姿を見ながら、彼の心配をしている場合ではない、と思った。
昼食を済ませると、私は軒に梯子をかけ、トタン屋根を確認した。案の定、所々に錆が浮い

ていた。十一年も経てば当然である。

私は、妻に敦の作業着を用意するよう頼み、近くのホームセンターへ向かった。

トタン用油性塗料三リットル缶一個、下地用油性錆止め塗料二リットル缶一個、ペイントうすめ液四リットル缶一個、七十ミリ刷毛二本、三十ミリ刷毛二本、錆取用金属ブラシ二本を購入した。一万円札を差し出し、お釣りの三百五十八円を貰った。

家に戻ると敦を呼び、共に屋根に昇り、まずは金属ブラシで錆と表面の塗料を剥がした。

今年も杭瀬川の桜は満開だ。

晴天のもと、私は再びペンキを塗る。

佳作

清水になった松岡

群鳥安民

午前八時の開店に合わせて従業員がせっせと仕込みをしている。俺は箒と塵取りを持って店先へと向かっていく。冷房が効いた屋内で作業していたかったのだが仕方がない。

八月の終わり。まだ厳しい残暑の中で、時折感じられる秋風が涼しくて心地良い。この季節になると、毎年あの時のことを思い出す。つられて、あの子のことも思い出してしまう。また逢えるだろうか。

掃き掃除を終えて店内に戻ろうとすると、店先の浅い水槽に水が張られ始めていた。俺はその水に少しだけ指先で触れる。やはり冷たい。そして、美しいくらいに透き通っている。五年前、俺が貪るように掬い上げたあの湧き水と一緒だ。

俺は元々、普通のサラリーマンだった。会社に行けば仕事の山とにらめっこ。家に帰れば愛する妻が出迎えてくれる。会社と家の往復で苦労と安息を繰り返す日々は、平凡ながらも俺的には満足だった。

だが、そんな日常は呆気なく終わった。上司が職務上のミスを俺に擦り付け、俺が非難の的になった。何度も潔白を訴えたが、弁解も虚しく俺は即行解雇となってしまった。

この不条理で自棄になった俺はギャンブルに明け暮れた。競艇やパチンコは着々と俺の貯蓄を擦り減らしていき、ついには口座を空にさせた。俺が堕落を極め尽くした頃、家の中も空虚になった。妻の持ち物が妻ごと消え去っていた。代わりに、テーブルには片方が記入済みの離

婚届が残されていたのだった。

平凡でも満足していた俺の生活は、借金を抱える底辺へと変貌。家賃を払えなくなった俺は、全財産の八百円を所持金にして、死に場所を探すように逃避行を始めた。契約切れのスマートフォンも置き去りにして、何も持たずに故郷を後にする。何もかも手離して、何だか心が軽くなった気がした。このまま借金とともに自分の存在も消してしまえば、もっと楽になれるのだろうか。そう思った俺は、適当な路線の電車に飛び乗った。

降り立った街は、俺の故郷とよく似て栄えていた。所詮電車賃八百円で辿り着ける場所なんてたかが知れている。駅の看板には「大垣」と書かれていた。

駅の階段を降りて出た大通りは商店街だった。昼を迎えた飲食店は暖簾を掲げ、芳しい香りを漂わせていた。ろくな飯なんて何日も食っていない俺にとって、この景色は目に毒だ。耐えられなくなった俺は、裏手の路地へと逸れていった。

空腹を押し殺しても、続け様に、夏の残暑は俺に渇きを芽生えさせた。ちょうど目の前に現れた赤い自動販売機が俺を惑わせた。カラフルなドリンクが陳列しているが、あいにく俺のポケットには十円玉が僅かに三枚。

何も買えないのは分かっていて、自販機に硬貨を投入した。奇跡でも起きないかと淡い期待を込めてみたが、どのドリンクの押しボタンも光りはしない。分かっていたのに絶望が押し寄せてくる。返却レバーには目もくれずに、俺はまたとぼとぼと歩き出していた。

もう水を飲むことしか頭になかった俺の耳に、水の流れる音が飛び込んできた。それは、清

流のせせらぎのような心地良い音だった。とうとう幻聴が聞こえるようになったかと煩悶しながら歩いていると、今度は水が湧き出している東屋を見つけた。

これが幻でないことを祈りながら、俺は一目散にその東屋に駆け込んだ。水に突っ込んだ両手は間違いなく冷たさを感じ取った。現実と分かれば、無我夢中でその湧水を啜り込んだ。その水のうまさは、今まで飲んできた水とは比べ物にならない格別さだった。

息も絶え絶えに水を求めていた怪我人に水を差し出したら、その怪我人は安堵感からそこで最期を遂げてしまった、という話を聞いたことがあった。きっと今の俺は、死んでいったその人と同じ気持ちなのだろう。

満腹になるほど水を飲んだ俺は、東屋の岩場に仰向けになって座り込んだ。

「願わくば　次は清水に　一掬の」

無意識にも、辞世の句みたいなものを詠んでいた。

「すごい。松尾芭蕉みたい」

びっくりして振り返ると、見知らぬ少女が俺を見下ろしていた。小学校の高学年くらいだろうか。

「松尾芭蕉？」

「俳句を詠んだ人。大垣では有名ですよ」

「へー、そーなんだ。」

特に歴史に詳しくも興味もなかった俺は、適当に聞き流していた。

「今の俳句どういう意味？　おじさんは清水さんになりたいんですか？」

「ちげーよ。ここの水がうまかったからさ。俺もこの水みたいに、人を感動させられる存在に

生まれ変わりてえなあって思ってよ。」

「『イッキク』ってどういう意味？」

「『一掬い』ってことだ。人を救うってのと掛けてるけどな。」

「へーすごい。『ここで一句』やね」

少女はよくある詠みの前振りをドヤ顔で口にした。

「詠み終わってから言ってもおせえだろ」

と少女にツッコんでみたが、

「そうか。じゃあ『これで一句』？」

と、締めの言葉にあっさりと流用していた。

「ねえ、おじさん名前は何ていうん？」

「……松岡湘だ。」

「なにそれ！ほんとに松尾芭蕉みたいやん」

名前を笑われてムッとしたが、その無垢な笑みに絆されてしまった。

「お嬢ちゃんは？」

「纐纈弓」

「コウケツ？　聞かねえ苗字だなあ。」

「うん。この辺の地方の苗字なんやって。『糸』書いて『交』書いて『頁』書いて『糸』書いて『吉』書いて『頁』……」

と空に書いて説明してくれるのだが、結局何文字なのかも分からない。

少女の指先を猫のように視線で追っていると、俺の腹が鳴った。

「水まんじゅう食べる？」
「水まんじゅう？」
「さっきね、水まんじゅう作りの体験に参加してね、作ってきたんだ。いっぱいあるから一つどうぞ。」
見せられたのは、中の餡が透けて見えている不思議な和菓子だった。
「えっ、水浸しなのかと思った。何これ。ゼリーみたい」
「外側のは、葛粉とわらび粉を混ぜて固めたんやよ」
この初対面の和菓子の扱い方に戸惑いつつも、俺は手を伸ばした。まるで豆腐を手に取るように、慎重に口元まで運んだ。まだひんやりとした水まんじゅうは、俺の口内を優しく冷やしていった。水が流れるように外皮が柔らかく崩れ、その中から現れた餡は、水を濁らせない程よい甘さだった。
「めっちゃうまいな、これ」
「よかった。ちょっと失敗してまったけどね」
少女はへへっと笑ってみせた。
「お店のやつならすぐそこで売ってるよ」
と大通りを指差すと、
「うちお母さん待たせとるから。じゃあね」
と足速に駆けていった。

その後の俺は、衝動的に和菓子屋に突撃していた。ここで働かせてほしいという突然の申し

出に、お店の人は顔を見合わせていた。一文無しになった事情を話すと、同情してくれたのか、仕事だけでなく住む場所まで斡旋してくれた。

「もう五年かあ」
店先の水槽の中で、カラフルなお猪口とその中の餡が揺らめいている。それを眺めていた俺は、自然と感慨の言葉を零していた。
無人販売の箱に並ぶどんなに色とりどりで甘美な飲み物よりも、俺はこの街の水が好きだ。そして、俺を助けてくれたこの街の人たちも好きだ。今の俺は、その一員になれているだろうか。
「こんにちは」
「お、弓ちゃんいらっしゃい。今年も来てくれたんだね」
「うん、一年に一回は水まんじゅう食べたくなっちゃうんで」
「そろそろ来てくれるんじゃないかと思っとったよ。毎年ありがとうね。ちなみにそれ、俺の仕込んだやつ」
「湘さん上手くなりましたね」
「あん時の弓ちゃんのよりかはまだまだだけどな」
「いいんですよそんな謙遜は」
お会計をしている最中に、俺は弓ちゃんの制服に目が行った。
「そういやあ今年高校生になったんだっけ？」
「はい。大垣桜高校に通っています」

「ってことは、上石津から墨俣に通うわけだ」
「そうなんです。地名覚えて、湘さん完全に大垣の人になりましたね」
俺にとって、その言葉は誉め言葉だった。

休憩時間、いつもなら俺は、一旦店を出て近くの自噴井に赴く。普段は持参の水筒で水を汲むのだが、今日は水筒を忘れてしまったため、最寄りの自販機に頼ることになった。釣銭と買った水を回収し、ペットボトルをカチッと開けてグイッと飲む。何処かの天然水も十分美味しい。でも、やはり大垣の水が一番だなあと思いながら、残りの業務へと向かって行った。
釣銭の十円玉が数枚多い気がしたが、特に気にも留めなかった。

2021 年度の「水の都おおがき 短編小説コンクール」には、
29 点の応募作品が寄せられました。
入賞作品の表記は、原作を尊重し、それに従いました。

水の都おおがき 短編小説コンクール 優秀作品集 2021

2022 年 2 月 26 日　発行
＜監修＞　中村航 (ステキコンテンツ合同会社)
＜編集・発行＞　（公財）大垣市文化事業団
岐阜県大垣市室本町五丁目 51 番地
（大垣市スイトピアセンター文化会館 2 階）
TEL 0584-82-2310